

今週の為替相場見通し(2025年8月18日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		146.22 ~ 148.63	147.19	145.50 ~ 149.50
ユーロ	(ドル)		1.1590 ~ 1.1730	1.1704	1.1600 ~ 1.1750
(1ユーロ=)	(円)		171.00 ~ 173.00	172.25	170.00 ~ 174.00
英ポンド	(ドル)		1.3400 ~ 1.3594	1.3548	1.3300 ~ 1.3800
(1英ポンド=)	(円)	*	198.13 ~ 200.28	199.49	193.00 ~ 203.00
豪ドル	(ドル)		0.6483 ~ 0.6568	0.6508	0.6450 ~ 0.6630
(1豪ドル=)	(円)	*	95.52 ~ 96.84	95.78	94.00 ~ 97.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 武藤 智哉

(1)今週の予想レンジ: 145.50 ~ 149.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

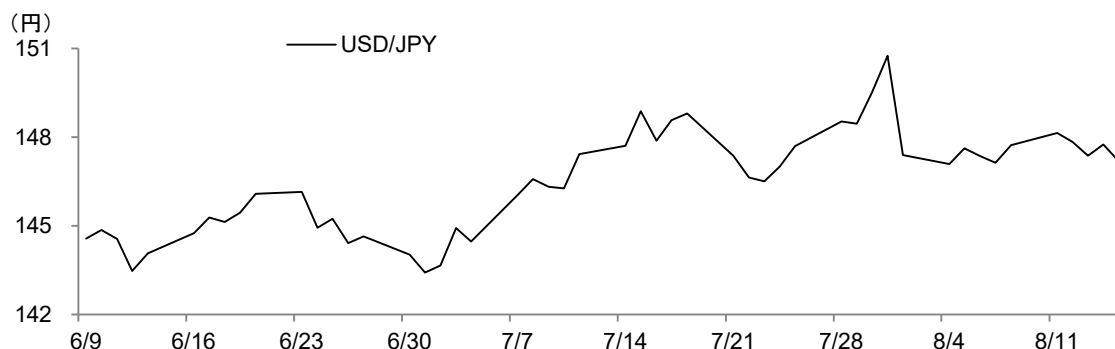
先週のドル/円は方向感を欠きながらやや軟調な推移となった。週初11日、147.66円でオープンしたドル/円は、本邦祝日のため動意に乏しい展開が続いたものの、その後は米金利上昇を支えに底堅く推移し、148円台前半まで上昇。12日、ドル/円は株高を背景に一時週高値となる148.63円まで上昇。その後、米7月消費者物価指数(CPI)の結果が概ね市場予想通りとなり、米利下げ観測が強まると、147円台後半まで下落。13日、日経平均が市場最高値を更新するなどリスクオン地合いとなるなか、為替は円売りで反応。ドル/円は一時148円台を回復するも、その後は米金利低下が重しとなり軟調に推移。海外時間には、ベッセント米財務長官による日米金融政策に関する発言を受け、ドル売りの流れが加速すると、ドル/円は一時147.07円まで下落。14日、引き続きドル売りの流れが継続する中、前日にベッセント氏が日銀の金融政策について言及したことを背景に円金利が上昇すると、ドル/円も一時週安値となる146.22円まで急落。ただ海外時間では米7月生産者物価指数(PPI)が市場予想対比大幅上昇すると、ドル/円はこの日の下落幅を全て取り戻し、148円付近まで上昇。15日、本邦4~6月期GDPの良好な結果を受け、日銀の利上げ観測がやや高まると、円買い優勢となり、ドル/円は146円台後半まで下落。海外時間では、一連の米経済指標の結果を受け、米金利上昇とともにドル/円もやや値を戻すと、147.19円で取引を終えた。

今週のドル/円は軟調な推移を予想する。米露首脳会談ではウクライナ停戦に関する具体的な合意には至らなかったが、追加制裁や対立の深刻化が回避された安心感からリスクオフの円買いはやや後退するか。ただし、トランプ政権サイドからFRBに対する度重なる利下げ圧力や、米関税政策を受けてもなお堅調な結果となった本邦4~6月期GDPを踏まえると、日米金利差縮小を背景とした円買いドル売りが優勢となりやすいとみる。また本邦では引き続き政局不安が意識されるなか、自民党総裁選の前倒しの可能性が浮上しているものの、手続きには相応の時間を要することや、ここきて石破茂首相の支持率がやや改善しつつあることから、短期的には参院選直後のような早期退陣の思惑による円売りの動きは出にくいとみる。そうしたなか今週は22日(金)にジャクソンホール会合にて行われるパウエルFRB議長の講演に注目が集まる。市場では ▲50bpの大幅利下げも意識され始めるなか、パウエル氏が大幅利下げの可能性も排除しない姿勢を見せた場合、ドル売り圧力は一段と強まるだろう。一方で引き続き様子見姿勢を維持、ないしは小幅な修正にとどまることを示唆した場合、ドルが買い戻される展開も想定されよう。また同日には本邦7月CPIが公表予定。今月は前月から伸びがやや鈍化すると予想されるなか、結果が上振れた場合、日銀の年内利上げ期待は一段と高まり円買い要因となる点にも注意したい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(8/11~8/15)の値動き:

安値 146.22 円 高値 148.63 円 終値 147.19 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第二チーム 原田 脩平

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1750 170.00 ~ 174.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

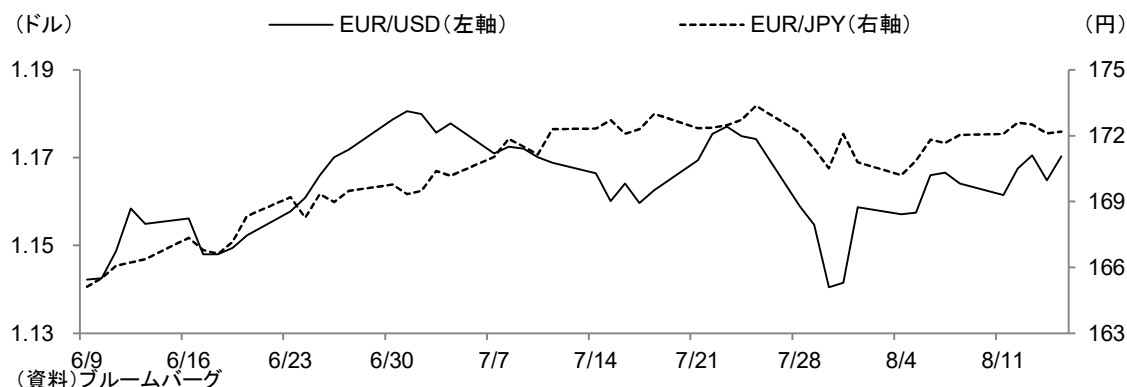
先週のユーロ/ドル相場は、週前半に下落した後、週半ばに大きく上昇したものの、再び下落しその後は値を戻す展開となった。週初11日のユーロ/ドルは1.1647でオープンすると、ユーロ買いが進み1.1675まで上昇したが、その後は米金利上昇を背景にドル買いが進み週最安値となる1.1590へ反落した。12日は独8月ZEW景気期待指数が市場予想を下回ったが相場への影響は限定的で、米7月消費者物価指数(CPI)への警戒感から1.1620付近で揉みあっていたが、米7月CPIの結果を受けてFRBの利下げ織り込みが進んだためドル売りが加速し1.1697まで上昇した。13日はベッセント米財務長官が「政策金利はおそらく1.5%~1.75%低くあるべきだろう」と発言した事などもあり、FRBの9月利下げ織り込みが高まりドル売りが進むと、週高値となる1.1730まで上昇した。14日はオープンからじり安の展開で、米7月生産者物価指数(PPI)が市場予想を大きく上回った事や、ベッセント米財務長官が「FRBに1.5%の利下げを求めたわけではない」と13日の自身の発言を修正した事をうけて1.1631まで続落した。15日は米経済指標の弱めの結果を受けて、ユーロ買いドル売りが進み1.1715まで上昇したが、結局1.1704で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は堅調な展開を予想する。足許ではFRBの9月利下げ織り込みが進み、ユーロ買いドル売りが優勢になるなどFRBの金融政策が契機となり相場をドル安へと誘発している。21日(木)~23日(土)に開催されるジャクソンホール会議では、22日(金)にパウエルFRB議長の講演が予定されている。パウエルFRB議長が利下げ再開に前向きな姿勢を示せば、FRBの利下げ織り込みが加速するだろう。ジャクソンホール会議にはラガルドECB総裁も出席予定であるが、ECBの利下げ停止のスタンスの変更を示唆しないと考えられるため、金融政策の違いからユーロ買いドル売りが高まるだろう。今週は18日(月)にトランプ米大統領とゼレンスキーウクライナ首相の会談が予定されており、ロシア・ウクライナ戦争が終結に向けて進展するかどうか注目が集まる。また、21日(木)にはユーロ圏8月製造業/サービス業PMIが発表される。EUは米国と15%の関税で合意したものの、企業の購買担当者の心理を悪化させる可能性があるため、結果が予想よりも弱かった場合にはユーロ安に注意が必要だが、ジャクソンホール会議前でもあり相場への影響は限定的と考える。他にも18日(月)にユーロ圏6月貿易収支、19日(火)にユーロ圏6月ECB圏経常収支、22日(金)に独4~6月期GDPの発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/11~8/15)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1590	高値 1.1730	終値 1.1704
(対円) 安値 171.00	高値 173.00	終値 172.25



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.3300 ~ 1.3800 193.00 ~ 203.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のポンド相場は対ドルで上昇した。週初11日、翌日に米7月消費者物価指数(CPI)公表を控える中で米金利が上昇し全体的なドル高となる。12日、米7月CPIがコアでは市場予想を上回ったもののヘッドラインで市場予想を下回り、先物市場では9月の利下げ織り込みが80%から93%まで後退。それを背景に全体的なドル下落、米株先物上昇となり、ポンドも対ドルで強含んだ。13日、特段の材料がないものの前日の流れを次いで引き続きドル売りとなる。14日午前、英4~6月期GDPが市場予想を大きく上回り底堅く推移。一方で午後、米7月生産者物価指数(PPI)が市場予想を上回り、ドルの買い戻しとなる。15日は前日の調整となり若干のドル安で推移した。

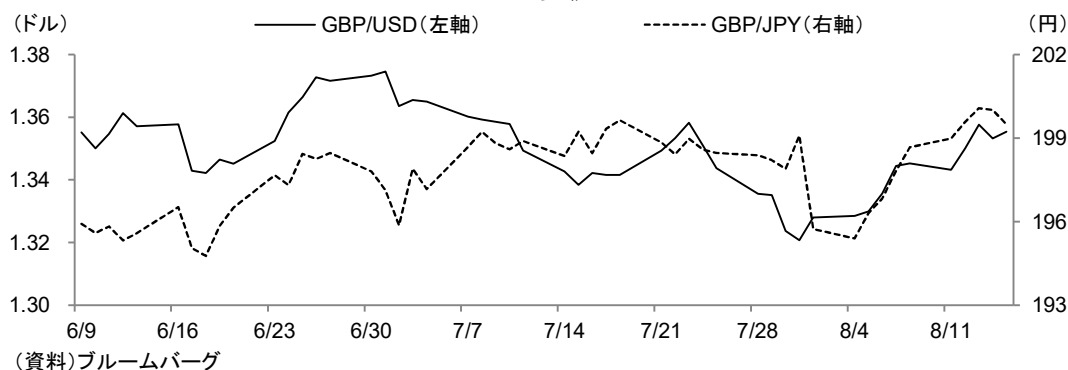
今週のポンド相場は上値重い展開を想定。直近のBOE政策金利発表における予想外のタカ転換が引き金となり、ポンドは前月後半の下落を取り戻す形で力強く反発している。テクニカルでは直近高値レベルで上値が重くなり、米7月PPIによるドル高の流れで一旦下落した状況だ。次のカタリストとして注目されるのは20日(水)に予定されている英7月CPI。デシインフレの停滞とインフレ再熱が懸念される中、結果が強含むようであればタカ転換の向きがより意識され7月の下落をすべて取り戻すべく上昇していく可能性がある。本稿執筆時点で先物市場における9月利下げ織り込みは既に1.9%まで縮小している。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/11~8/15)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3400 高値 1.3594 終値 1.3548

(対円) 安値 198.13 高値 200.28 終値 199.49



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6630 94.00 ~ 97.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

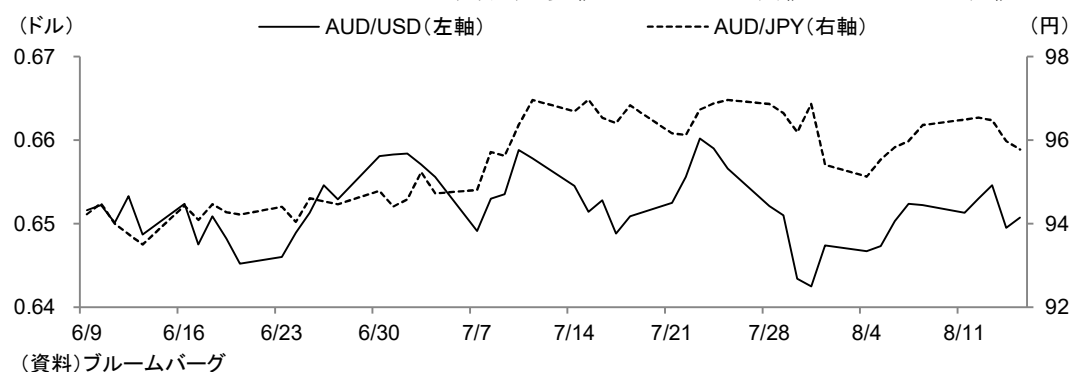
先週の豪ドルは方向感なく推移した。11日、0.6517でオープンした豪ドルは翌日に米7月消費者物価指数(CPI)の公表を控えてドルが上昇する展開に0.65台ちょうど付近まで下落。12日、RBA理事会ではコンセンサス通り▲25bp利下げ実施。四半期報告書にてGDP成長率を引き下げたことやブロック総裁による記者会見では一段の緩和が示唆されたことを受けて豪ドルは週安値となる0.6483まで下落。しかし、NY時間に公表された米7月CPI結果を受け、FRBによる利下げ観測が高まった為、米金利低下を伴いドル安地合いとなった。豪ドルは0.65台半ば付近まで上昇するなど、下に往って来いの展開となった。13日、豪4~6月期賃金価格指数は市場予想通りの結果となり反応は限定的。海外時間ではベッセント米財務長官がFRBに利下げを求める旨発言したことを受けて米金利低下・米株高となる中、豪ドルは0.65台で底堅く推移した。14日、豪7月雇用統計は市場予想通りだったものの、前月からの雇用者数が伸びたことが好感され週高値となる0.6568まで上昇。しかし、NY時間に公表された米7月生産者物価指数(PPI)が市場予想を大きく上回った事やFRBに対する利下げ指示を否定したベッセント米財務長官の発言を受けて、米金利上昇と共にドル買いが進むと0.65台割れまで下落。15日、週末を控えてかドル売られていく展開に豪ドルは底堅く推移。NY時間に公表された米7月小売売上高は市場予想を下回ったものの、前回分が上方修正される等強弱入り混じる結果に方向感が出なかった。結局0.6508で越週した。

今週の豪ドルは堅調な株式市場にもサポートされ確り推移を見込む。

先週開催されたRBA会合では、全会一致での利下げが決定。域内のインフレ圧力が後退する中、雇用環境の悪化も意識されており、予想通りの結果となった。総裁会見では先行きの運営について、2回の追加利下げ予測の前提としている一方、大幅利下げに関する議論は行われていないとした。同発言もあってかRBAによる利下げも26年2月会合までで2回織り込まれているなど従来通り連続利下げは想定されていない。今週は19日(火)に豪8月ウェストバック消費者信頼感指数、21日(木)に豪2月製造業・サービス業PMIが予定されている。インフレデータを会合毎に確認するというスタンスからも、前述した指標では現状の利下げパスに与える影響は少なく反応は限定的だろう。注目材料は21日より開催されるジャクソンホール会合でのパウエルFRB議長発言だろう。市場は9月利下げに向けた発信を期待しており、利下げ催促相場となっている状況。利下げ期待に伴って先週同様リスク資産が堅調な地合い継続に豪ドルはサポートされ確り推移するだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/11~8/15)の値動き: (対ドル) 安値 0.6483 高値 0.6568 終値 0.6508
(対円) 安値 95.52 高値 96.84 終値 95.78



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。